

2022年 冬号
No.21

市美だより

鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館

〒892-0853

鹿児島市城山町4番36号

TEL(099)224-3400



展示会の会期等はすべて、新型コロナウイルス感染症の地域の感染状況により変更になる場合があります。詳しくは美術館ホームページでご確認ください。

無料開放日のお知らせ

毎月第3日曜日は、小・中学生は無料開放日です。

所蔵作品展 + 小企画展を無料で鑑賞いただけます。12月18日①、1月15日②、2月19日③…



東郷寿勝 《添寝人形》 19世紀後期

陶器、高13.2×幅33.0×奥行9.5 cm 鹿児島市立美術館蔵

白薩摩は、薩摩焼の一つで、象牙色の表面に貫入と呼ばれる細かなひび割れを生じさせ、染付や色絵、金彩などで装飾を施すのが特徴です。

幼児をあやす母親の姿を白薩摩で表現したこの作品は、日置市美山に生まれ、同地で窯を開いた陶芸家東郷寿勝（1855-1936）によるものです。明治期に開催されたパリ万国博覧会やイギリスで開催された日英博覧会に出品するなど国内外で活躍し、第12代沈寿官らと白薩摩の繁栄に貢献しました。太平洋戦争の開戦・終戦時に外務大臣を務めた東郷茂徳の父でもあります。

寿勝は「ひねりもの」と呼ばれる人形などの置物細工に、精緻な装飾を施した作品を得意としました。



ゆったりと寝そべる母親が持つ果物に興味津々でつかまり立ちする幼児の姿を、繊細な表情や仕草に加え、着物の模様など華やかな色絵付で表現している点が見どころの一つです。陶器の人形ですが、その肌には温もりや柔らかさまで感じられ、わが子の健やかな成長を願う母親の優しさが伝わってくるようです。

冬の所蔵品展 (西洋美術+郷土作家+特集コーナー)

ミニ特集：タイムスリップ—100年前の美術

会期：12月13日(火)～3月5日(日)

今回のミニ特集では、所蔵品の中からおよそ100年前に制作された作品を集めてご紹介します。一口に100年と言いますが、それは人の平均寿命を超える長い長い年月です。改めて考えてみると、その間にいくつかの戦争や多くの災害が起こり、また、美術品は高額資産でもあることから、犯罪等に巻き込まれて行方不明になる可能性もあり、ここに公開されていることが決して簡単なことではないことに気づかされます。1920年代は、好況下のアメリカに生まれて現代にまでつながる新たな生活様式が、ヨーロッパや日本などにも広がり「黄金の20年代」と呼ばれた時代でした。一方で、その末期には世界恐慌が起こって世相が暗転したため、二つの世界大戦のはざまの束の間の華やかな時代でもありました。そのような背景のもと、それぞれの作家が私たちと同じく日々の暮らしを営む中で、この作品の制作に費やした一定の時間を想像してみてください。彼らは当時、どのような環境のもとでこれらの作品を作り上げたのでしょうか？そして当時の彼らの状況は100年後の現在とどれほど異なっているのか、あるいは変わらない部分も存在するのか？今回は、サンプルとしてそれぞれ一つの視点を掲げてみましたが、皆さんも想像を膨らませて、100年という時の流れを感じながらご鑑賞いただければ幸いです。



マリー・ローランサン 《マンダリンのレッスン》1923年 油彩・キャンバス

現したこの作品によって、広重は一躍人気の風景画家となり、葛飾北斎と共に幕末の浮世絵界をリードしました。本展では、1918～19(大正7～8)年に五葉が編集監督し岩波書店から発行した復刻『広重画 保永堂板東海道五十三驛風景續画』に収録された木版複製全60枚を展示します。人気ゆえに江戸時代に膨大な枚数が摺られたこのシリーズは、後の摺りになるにつれて版の摩耗や色の変更によってオリジナルの雰囲気損なわれたものもあったため、

五葉は復刻にあたり、複数の摺りから最も良くできたものを選び、紙も広重が選んだものに近いものを選択するというこだわりを見せています。五葉の浮世絵研究資料や復刻のための下絵等とあわせてご覧いただくことで、広重の風景画の抒情美と、浮世絵の研究と復刻にかけた五葉の情熱をお楽しみいただけたら幸いです。

で楽しめる、遊びや読み物をご紹介します。右のQRコードや美術館ホームページのイベント講座からアクセスしてみてくださいね。



所蔵品による
小企画展のご紹介

広重 VS 五葉 甦る浮世絵風景版画の傑作

～復刻『保永堂版 東海道五十三次』

令和4年12月20日(火)～

令和5年2月5日(日)

歌川広重(1797～1858)は、江戸後期に活躍した浮世絵師です。一方の橋口五葉(1881～1921)は大正期に江戸期の錦絵(多色摺り木版画)の技法をもち用いて優れた美人画を制作したことから「大正の歌麿」と称され、熱心な浮世絵研究者として江戸期の名作の復刻にも尽力しました。広重が活躍した江戸後期は、交通網の発達と経済的なゆとりから庶民の旅行熱が高まり、街道を描いた錦絵のシリーズが多数生まれました。中でも、江戸と京都を結ぶ東海道は最もよく描かれ、人気の火付け役となったのが広

重の保永堂版『東海道五拾三之内』(1833～34(天保4～5)年頃発行)でした。風景描写に季節や気象の変化を取り入れ、街道沿いの景色を抒情的に表



橋口五葉が復刻し1918～19(大正7～8)年に発行した『広重画 保永堂板東海道五十三驛風景續画』より《日本橋(朝之景)》

美術館の所蔵作品をうち
ミュージアム